# 陵墓関係調査概要

昭和四十九年度に行なった、次の工事に伴う調査の概要を記す。

一　履中天皇陵陪冢は号の裾保護（大阪府堺市旭ヶ丘南町）

二　伊豫親王巨幡墓の境界線の崩壊防止（京都市伏見区桃山町遠山）

三　深草北陵前の深草部事務所改築（京都市伏見区深草坊町）

四　崇神天皇陵の外堤護岸（奈良県天理市柳本町）

五　雄略天皇陵の外堤護岸及び外構柵設置（大阪府羽曳野市島泉）

六　崇神天皇陵陪冢い・ろ号の外構柵設置（奈良県天理市柳本町）

七　一乗院宮墓地の外構柵設置（奈良市雑司町杉ヶ谷）

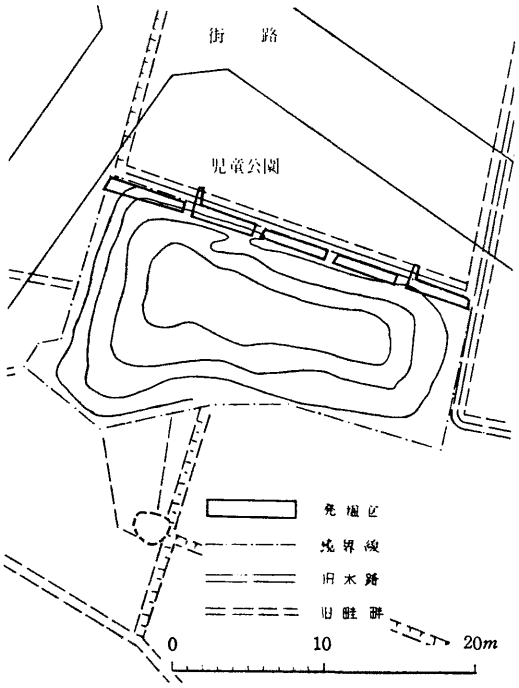
調査は当部陵墓調査室と担当の陵墓監区職員が行ない、工事の設計・実施は当庁京都事務所工務課があたった。遺構・遺物の鑑定は、崇神天皇陵外堤については書陵部委員末永雅雄氏、文化財保護審議会専門委員有光教一氏に、巨幡墓、雄略天皇陵外堤、崇神天皇陵陪冢については末永氏に、雄略天皇陵、深草北陵の出土品の鑑定は名古屋大学助教授楢崎彰一氏にお願いした。又崇神天皇陵、雄略天皇陵外堤の地質地層の鑑定は奈良教育大学教授梅田甲子郎氏に、護岸工法の技術指導は建設省土木研究所赤羽支所の砂防部長枸杞芳彦氏に委嘱した。

なお、外堤工事区域の工事前の百分の一の地形図を、崇神天皇陵については日本工事測量株式会社に、雄略天皇陵外堤については徳永工業株式会社に作製させた。

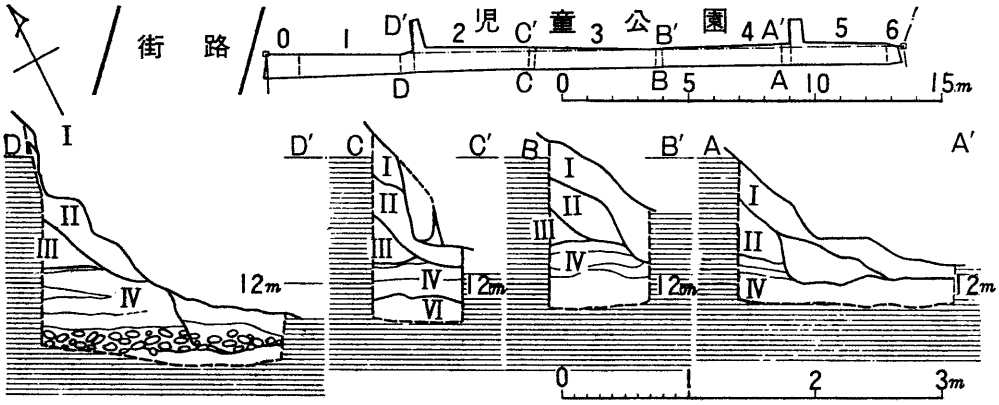
## 一　履中天皇陵陪冢は号の裾保護の石垣設置区域の調査

履中天皇陵陪冢は号は、履中天皇陵後円部の西北五五〇メートルの、堺市旭ヶ丘南町（旧神石村大字石津字酒呑塚四六二番地）にあり西酒呑塚という。石津ヶ丘台地上に占地する百舌鳥古墳群の西端に位置する。東三〇メートルのところに高塚らしいものがあったが詳細不明で、現在はない。この陪冢は、長辺二七メートル短辺一〇メートルの長方形プランで、高さ約三メートルの截頭四角錐形を呈する。既設の金網柵を、間知ブロック積みの土台の外構柵に取替えるにともない、昭和四十九年七月十四日から四日間、事前調査を行なった。調査は、工事予定箇所に、幅〇・七メートル長二五メートルのトレンチを設け、0～6区に分割して発掘した。2・4両区では、北に幅〇・五メートル長一メートルのサブ・トレンチを伸ばして調査した。その結果、は号陪冢の調査地は、下に円礫を敷いた上に盛土したものであることを確認した。しかし、これを

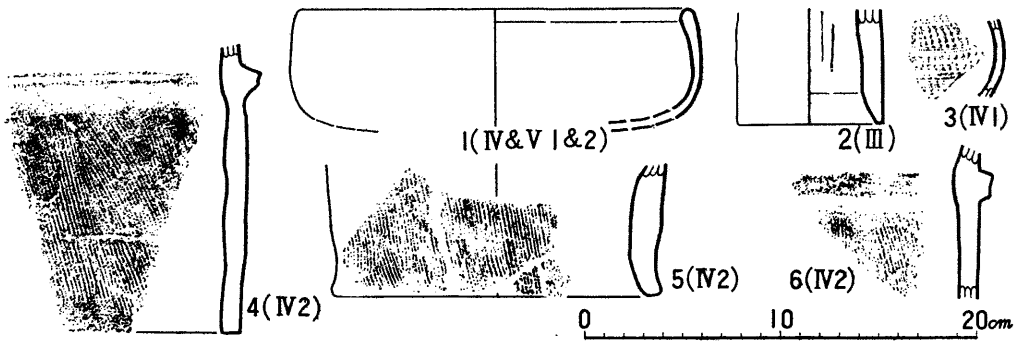
第１図　履中天皇陵は号陪冢の位置
（縮尺 1/30,000）




第２図　履中天皇陵は号陪冢トレンチの位置（縮尺 1/500）




第３図　履中天皇陵は号陪冢のトレンチ平面および断面（縮尺平面は1/300、断面は1/60）




第４図　履中天皇陵は号陪冢の出土品（縮尺1/4 カッコ内のローマ数字は層位、算用数字は発掘区）

封土とする積極的な証左は得られなかった。

標準的な層序は次のとおりである。

第Ⅰ層　厚さ一五～四〇センチほどの腐植土混りの黒色土層。

第Ⅱ層　厚さ三〇～五〇センチのしまりのない砂質粘土で、いわゆる「マサ土」である。第Ⅲ層が樹根等により攪乱をうけ、一方で流土が堆積してできたものであろう。第Ⅲ層との境に凹凸が著しく、下部に埴輪片をかむ。

第Ⅲ層　厚さ三〇～五〇センチで、風化した拳大以下の礫を少なからず含むブロック状粘土よりなるしまった土層。上部に埴輪片をかむ。

第Ⅳ層　厚さ二五～六〇センチで、黒色・灰色・褐色・赤褐色などの砂質土・粘土質を薄く敷いてつき固めた土層。

第Ⅴ層　一〇センチ前後の円礫が厚さ二〇センチほどの層をなし、間は灰色粘土（Ⅳ6層）でつまっている。埴輪の破片（第4図4～5）・土師器（1・2）および須恵器（3）が、この層の中と直上より検出された。

出土品は、土師器・須恵器・埴輪の破片がごく少量ある。第Ⅱ・Ⅲ層より埴輪の細片が散発的に出土しているほか、残り全て、礫層中とその直上より出土したものである。

土師器（第4図1・2）　掘りあげた土の中から鍋形の土師器二個体分の破片が多数採集され、おそらく完形品が円礫の上に置かれていたものであろう。1はそのひとつで、内彎した口縁部に浅い丸底を付すもので、外面胴部以下に煤が付着している。胎土・焼成は、中近世のものに類似する。2は、土管様の不明土器。内面にしぼり目を残す。

埴輪（第4図4～6）　全て円筒部。径が4は約二五センチ、6は一九・五センチ。縦方向のハケ目は粗で、突帯も低く、焼きもあまりよくない。全体に粗雑な造りである。

この調査の終了後、履中天皇陵前方部外堤の拝所の西脇の部分に金網柵を新設するのにともない、半日をかけて事前調査を行なった。柵の基礎にあたる地点九箇所にテストピットを穿ってみたが、何ら遺構遺物を検出しえなかった。

これらの調査の結果、保存を要する遺構は認められなかったので、計画のように工事を行った。

（笠野　毅）

## 二　巨幡墓の境界線崩壊防止工事の立会調査

桓武天皇皇子伊豫親王巨幡墓は伏見桃山陵の東約一キロにあり、宇治川北岸の丘陵上に位置している。古く黄金塚、或は篁塚と称され、形状は前方後円墳ともいわれているが、周辺の地形がかなり変形しているので、正確な形状を把握することは困難である。現在墳頂に当る部分を当庁で管理しており、五輪塔一基が安置されている。西側の隣接地が長年の採土のために削平され、境界線が約一二メートル前後にわたって切り立った断崖となり（第5図A・B間）崩壊の危険があるので、昭和四